

「かなとのホースケ」

その春、かなとは年長組になりました。お風呂に入った時には、ひとりで服を着ることだってできます。でもひとつだけ誰にも言えない秘密がありました。かなとのおうちの近くに神社があつて、お社は小さいのですが、周りは大きな大きなクスの木やたくさんのドングリの木のある森になっていました。夜になるとそこから

「ホホーツ、ホホーツ」

と言う声が聞こえてきます。かなとはその声の主がなんだか分からず怖かったのです。



かなとは思いきつて、となりに住んでいるおじいちゃんに聞いてみました。

「アハハ、かなとはあれが怖いのか。あれはフクロウという鳥だよ」

「おじいちゃんもまだフクロウは見ただことはないんだけど、保育園で飼っているチャボより大きな鳥だよ。なんでも昼間は寝ていて夜になるとホホーツと鳴くんだ。とっても大きな顔の真ん中に、ネコみたいな大きな目玉が二つ並んでいて、真っ暗な森の中でもぶつからずに飛べるんだそうだ」

かなとはクレヨンでニワトリの体を描き、頭はネコで、その顔には大きな目玉を描いてみました。なんだかもっと怖くなりました。

「おばあちゃん。フクロウってどんな鳥」

今度はおばあちゃんに聞いてみま



した。

「おやあ、かなとはフクロウを知らないんだね」

「フクロウはかわいいそうな鳥でね。昼間は目が見えないんだよ。それでカラスやトンビや、時にはスズメに



かなとのホースケ

「かなとのホースケ」

までいじめられているんだよ。そのかわり夜になったら、耳まで裂けている大きな口で、昼間にいじめたみんなに仕返するんだよ」

かなとは赤いクレヨンで顔の真ん中に大きな口を描きました。もつともつと怖い顔になりました。「ママ、フクロウは何を食べているの」

今度はママに聞いてみました。「さあ、何を食べているんでしょうね。なんでも小さな動物を捕まえて食べるんだって。ネズミとか小鳥とかじゃないかしら」

台所で夕飯の支度をしながら教えてくれました。

かなとはびっくりしました。ネズミだって小鳥だって、あんなに素早いし、かわいいのに、それを捕まえて食べてしまうなんて、なんだか、とっても悪い奴のように思いました。



ら目を閉じてじっとしています。

どうやら巢から落ちた鳥のヒナのようにです。そこらの木に親鳥がいないか、巢はないかと探してみましたが見つかりません。どうやらヒナは落ちた時、親を探して動いてしまったようです。それでヒナのお母さんも見つかることが出来なかったのでしょうか。

かなとは勇気を出して、ヒナを両



た。パパが帰ってきました。

「パパ、フクロウって、悪い鳥なの」
「パパはいきなりそう聞かれて、びっくりしましたが」

「そんなことはないさ。悪い鳥なんていやしないよ」

「でも、ネズミや小鳥を食べるって、

手で抱えあげました。ヒナのふわふわの毛は温かくて、よく見るととてもかわいい顔をしていました。

「ママ、この鳥さんをおうちで飼ってもいい」

「そうね、このままだと死んじゃうね。なんていう鳥だかママも知らないけど。おうちに帰ればパパが知っているかもね」

この神社の森にはイタチもいますし、タヌキもいます。かなとはこのままヒナを置いて帰るわけにはいかないと思ったのです。ママがハンカチを広げて、ヒナをやさしく包んでくれました。

それからすぐ、梅雨になり、梅雨が明けて夏が来て、かなとのつれてかえった鳥は大きくなりました。白かった毛はすっかり、茶色の羽に変わりましたが、ネコみたいに平たい顔と大きな目玉が本当にかわいい

ママがいったよ」

「そりゃあ、ネズミくらい食べるさ。だって足にはすごい爪が生えているし、釣り針みたいにカギになつたくちばしがつても鋭くて、ネズミなんか逃げられないだろうな」

かなとは今度はあの大きな口にカギになった鋭いくちばしを描き、足にも大きなカギのような爪を描きました。そして「ホーッ、ホーッ」で鳴くそのフクロウという鳥がもつともつと怖くなりました。

ツバメがたくさん飛んできて、高く低く飛ぶようになりました。お母さんと一緒に神社に出かけました。そしてそこで、かなとは白くてふさふさの毛の生えた小さな生き物を見つけたのです。

白い毛は少し汚れてぬれているようです。寒そうに、少し震えなが

のです。体はそのまま、大きな目玉の顔だけをくるりと後ろ向きにすることもできます。

餌をねだる時はギャーッ、ギャーッってすごい声で鳴くのだけど、それでもかなとはその鳥がかわいくて仕方ありませんでした。

「ホースケ」かなとはその鳥を「ホースケ」と呼んでいました。かなとも今ではその鳥が、実はあの怖く



「かなとのホースケ」



ります。でも、次の朝、かなとが起きて見に行くと、ホースケはおうちの中で寝ています。かなとは毎朝、ホースケが帰っているのを見て、ようやく安心して、ママの車に乗って

保育園に行くのです。神社のご神木になっっているイチョウの木の葉が少しづつ黄色くなりました。するとホースケが帰っ

てこなくなったのです。次の日も、その次の日もホースケは帰ってきませんでした。かなとは少しさみしかったのですが、
「ホースケはきつと、お母さんやお父さんに会えたんだね」
ママにそう言いました。
何日かしたある晩、かなとはホースケの夢を見ました。ホースケはお父さん、お母さんと一緒に、神社の森の木の上に並んでいました。とてもうれしそうに「ホーッ、ホーッ」て鳴いていました。
今夜も神社から「ホーッ、ホーッ」という声が聞こえてきます。でも、今ではかなとは少しも怖くはありません。だって、かなとのホースケがかなとに「おやすみ」といって、鳴いてくれているのですから。

て怖くて仕方がなかったフクロウだということを知っていたのです。かなとはホースケのために、バツタをとってきて食べさせました。ママにスーパーでニワトリのレバーを買ってきてもらって、食べさせたりもしました。かなとはホースケのお世話は何でもひとりです。近頃の獣医さんのおじさんから、どうやって飼ったらいのか教えてもらったのです。

ホースケは初めは段ボールの箱で寝ていたのですが、おじいちゃんが止まり木のある立派なおうちを作ってくれました。おうちには庭に置いてあって、その中で寝るようになりました。昼間は眠そうに目を半分とじていることが多いのですが、夜になると大きな目玉をぱつちりと開いて餌をねだります。
赤とんぼがたくさん飛ぶように

なつた頃、ホースケはおうちの中で羽を広げて、バツサ、バツサと羽ばたくようになりました。パパとおじいちゃんとは相談して、夜になるとホースケのおうちの大きな扉を開けておくことにしました。かなとはほんとうは心配でした。ホースケが

夜をひとりで過ごしていることがかわいそうで、気になっていたのです。でもお父さんやお母さんに会えたらいいなとも考えるようになりました。
夜になるとホースケはおうちを出て、かなとが寝る頃にはいなくな